

## 第14の岐路・学資問題

さて師範時代を終わろうとしている時に当たって、今ひとつ私としては触れなければならないことがあります。それは他ならぬ学資の問題であります。すでに愛知師範でさえ、一小作百姓の森家の力では行けず、実家の祖父の生きている間は半額の補助があったのですが、祖父の没後はそれもなくなり、従ってやむなく、なけなしの田を手放し、しかも私には全然それを告げなかったことはすでに述べました。

このような事情で私は師範在学中も「高師へ……」などとは夢想だにしたことはなかったのですが、卒業して西三河の一隅に身を置くことになった私の心境に対して、在学中親しかった5人で出した回覧雑誌の友人の五名が、「自分たちで学資は出してやるから、お前は高師へ進め！」と切に奨められたので、これを親代わりの日比の伯父に相談したところ、伯父のおっしゃるには、「お志は忝いけれども、友達に学資を出してもらおう事はどうか」というお話で、否定的見解であった。私ももちろん同感でございまして、その後はそのまま礼を言ってお断りをいたしました。

ところがその後、これも先にちょっと申しましたように、実母の甥に当たる（姉の息子）山口精一氏という方より、「とりあえず200円（現在の価値2300万円？）出すから、高師へ進むように……」とのお申し出がございました。この方は伯父夫妻の意見もあって、結局お受けすることになったわけです。ところがそれについて、今から考えるのも我ながら面白い事は、「二年で学資が尽きてしまえば、また元の小学校教育に還るまでのことだ」との考えで、そこには何らの未練もなかったことでありまして、この点は今考えても不思議に思われますが、結局私にとっては、「小学校教育、すなわち国民の義務教育こそが、私の使命である」との考えが、その頃よりすでに暗裡に兆していたようでございます。

ではその後、この問題はどのようになったかと申しますと、2年生の終わりごろに、大阪の某篤志家の寄進に寄りまして、その方から学資をいただくことになりましたが、その方が「トリスウイスキー」の創業者の鳥居信次郎氏であることが、その後十数年後に分かったので、直接お礼に参上してお目に掛かった事は一代の思い出でございます。

また、大学時代の学資は、四日市の実業家の小菅剣之助氏が還暦の記念にといつて、三重・愛知の両県下の学生に、学資を支給されることとなりました。その知らせを日比の叔母より受けて、直接四日市のお宅に参上したわけです。しかるに当時私は、すでに広島講師を卒業をして、一年の義務教育を大坂府立阿倍野高等女学校で勤務中でありまして、小菅家へも背広姿で参上したわけです。しかるに應對された方は番頭さんらしき人で、先方としては旧制高校の学生を予想しておられたようでございますが、すでに高等女学校に勤務し、その上「哲学」志望などという、まるで霞でも吸うような学問をしたいからとの当

方の言に、私としては望みなしという印象でありまして、もはや帰ろうとしていたところへご夫人らしき方がお帰えりになられ、その方にこちらの志望を申しあげたところ、よく肯いてお聞きいただいたわけでございます。もちろんその場では合否の発表はなかったのですが、後日採用のご通知を頂くこととなり、まったく奥様のご理解の故であると思われ  
ます。